

学励コース「医療専攻」たより



新潟県立新潟西高等学校 Vol.6 平成27年1月30日

医療業務に携わる人材(看護師・保健師・医療検査技師・診療放射線技師等)育成のための進学指導を行います。→ 新潟大学医学部保健学科、新潟県立看護大学、新潟医療福祉大学、新潟青陵大学等の進学を目指します。

〇12月4日(木) 長岡西病院 病院見学

12月2日(火)に強風で考査が実施できず、期末考査が12月5日(金)まで1日繰り下がってしまいました。考査最終日前日ではありましたが、予定を変更するわけにはいかず、午前中の考査後の12:30に学校を出発して、高速道路で長岡西病院へ向かいました。



【ビルマからの仏様とビハーラ僧の森田先生】



【施設の説明 看護師長石村先生】



【質疑応答と御礼の御挨拶】



【患者様の真心のこもったお地藏様】

12月4日(木) 当日のプログラム:

オリエンテーション

講話「緩和ケアについて～命と向き合うということ～」ビハーラ病棟師長石村和美様・質疑応答
院内視察・説明 (ビハーラ病棟師長・石村和美様) (ビハーラ僧・森田敬史様)・質疑応答

【生徒の感想】

今回見学した長岡西病院は、他の病院と雰囲気が大きく異なっていました。キッチンや、家族室があり、患者様が第二の家のように家族との関わりがもてるようになっていました。特に驚いたのは、院内に仏像があって、お参りができることです。日本では、このような仏教系の施設は東京と新潟の二カ所にしかないとお聞きしました。このような施設がもっと増えれば良いなと思いました。

緩和ケアの現場を初めて訪問させていただきました。正直に言って、最初は悲しいイメージがありましたが、実際に行ってみると、患者さんをはじめ、看護師さん、ボランティアさん、みんなが笑顔で過ごしていました。看護師長の石村先生の講話では、緩和ケアの現場だけではなく、看護師全般に必要なお話をたくさん聞くことができました。「患者さんの人生の最終章に登場できることは幸せなこと。」というフレーズが心に残りました。

今年度最後の病院見学で、なかなか触れることのできない緩和ケアについて知ることができて、とても貴重な経験が積めました。死が近いと告げられて、頭の中が真っ白になる中で、周りの人の支えがどれほど大切なのか考えさせられました。患者さんをサポートしていく医師や看護師の存在は大きく、相手がやって欲しいことをやり、相手の価値観を知ることが大切なのだ改めて感じました。ビハーク病棟を持つ病院が日本各地に増え、死と向き合う人が自分の時間を持てるようになるといいなと思いました。

病院内の見学では、様々な配慮を見ることができました。ベッドのまま、テラスに出ることができたり、植木を置いて心を和ませたり、まぶしさを軽減するために蛍光灯に手作りのカバーを付いたり、足音を響かせないために、床にカーペットを敷いたりと、とても驚きました。

今までは、その人の命を長くすることが医療の使命だと思っていましたが、緩和ケア・ターミナルケアというものに触れて、限りある命を大切にすることが、身に染みしました。病院見学の途中で看護師さんからお聞きした、「ドアの向こうで、みんな頑張って生きているんです。」という言葉に、衝撃を受けました。今まで当たり前だと思っていたことが当たり前でなくなるという、病院見学でした。

今回の見学では、病棟に喫煙室があったり、仏様の像があったり、普通の病院にはないものがたくさんあり、驚きがいっぱいでした。中でも一番の驚きは、喫煙室でした。私は、「タバコ＝肺がん」というイメージがあり、がん宣告された患者がタバコを吸いながら病院生活を送っていることにビックリしました。さらに、ベッドから起き上がることが難しい患者のために入り口が広く、ベッドごと喫煙室に入ることができるということも驚きでした。患者さんが過ごしたように1日を過ごし、時間に縛られない過ごし方ができる裏には、病棟側のたくさんの工夫があるのだと感じました。

今まで病院見学をしてきた中で、一番衝撃を受けた病院でした。今までは「緩和ケア」に対して、漠然としたイメージしかなかったのですが、看護師長さんの講話をお聞きして、私が想像していたよりも患者さんに寄り添うものなのだなあと感じました。「患者さんとしてではなく、一人の人として関わる。」「患者さんが自分でできる領域を看護師は侵してはならない。」という言葉がとても印象に残りました。「看護師が手伝えれば早く終わることも、患者さんが『自分でできる』ことは、その人らしくあるために必要なことだ。」という言葉が肝に銘じようと思いました。